

Supported by  日本 THE NIPPON
財団 FOUNDATION

Tokyo String Quartet Concert

Friday, 8 February 2013
Hamarikyu Asahi Hall, Tokyo

主催 Presented by

日本音楽財団
NIPPON MUSIC FOUNDATION

Program

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン
Ludwig van Beethoven (1770-1827)

弦楽四重奏曲 第11番 ヘ短調 作品95「セリオソ」
String Quartet No. 11 in F minor, Op. 95 “Serioso”
(1810)

- I. Allegro con brio
- II. Allegretto ma non troppo
- III. Allegro assai vivace ma serioso
- IV. Larghetto espressivo – Allegretto agitato

フェリックス・メンデルスゾーン＝バルトルディ
Felix Mendelssohn-Bartholdy (1809-1847)

弦楽四重奏曲 第4番 ホ短調 作品44第2番
String Quartet No. 4 in E minor, Op. 44 No. 2
(1837)

- I. Allegro assai appassionato
- II. Scherzo – Allegro di molto
- III. Andante
- IV. Presto agitato

*東京クワルテットのメンバーに、曲解説、楽器貸与、財団主催演奏会での経験などについて寄稿していただきました。是非ご一読ください。

We hope you will enjoy the articles contributed by each member of the Tokyo String Quartet about the concert program, the loan of the instruments, and the experiences at the concerts presented by Nippon Music Foundation.



公益財団法人 日本音楽財団
会 長 小 林 寛

本日は、ご来場いただき誠にありがとうございます。

日本音楽財団は 1974 年に日本における音楽文化の振興を目的に設立され、1994 年からは、西洋クラシック音楽を通じた国際貢献のため、弦楽器貸与事業を実施しております。現在ストラディヴァリウス 18 挺、グアルネリ・デル・ジェス 2 挺の計 20 挺を保有し、国籍を問わず、世界を舞台に活躍する演奏家へ無償で貸与しております。また、これらの名器を次世代へ継承する管理者として、保全に努めております。

当財団は楽器貸与事業を開始するにあたり、1994 年、アメリカ・ワシントン D.C. のコーコラン美術館より、ストラディヴァリウス「パガニーニ・クワルテット」を購入しました。その翌年から、既に世界の第一線で活躍されていた東京クワルテットにこのクワルテットを使っていただき、早や 18 年が経ちました。

東京クワルテットには、これまで開催されたストラディヴァリウス 10 挺以上が集まる「ストラディヴァリウス・コンサート」全てにご出演いただきました。プログラム構成をはじめ、主軸となってご尽力いただき、深く感謝しております。

既にご存知のとおり、東京クワルテットは、44 年にわたる輝かしい歴史に終止符を打ち、2013 年 6 月に解散されることになりました。当財団が皆様にお届けする最後の「東京クワルテット・コンサート」を、どうぞお楽しみください。

本日のコンサートは、日本財団のご支援により実現できました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

Makoto Kobayashi Chairman, Nippon Music Foundation

Thank you very much for attending the “Tokyo String Quartet Concert”.

Nippon Music Foundation was established in 1974 with the objective to “enhance music culture” in Japan. In 1994, the Foundation started the “Instrument Loan Project” through which the Foundation has strived to make universal contributions by purchasing top quality stringed instruments. The Foundation now owns 18 Stradivarius and 2 Guarneri del Gesù, and as a custodian of these world cultural assets, maintains them for future generations and loans them gratis to internationally active musicians regardless of their nationalities.

The “Paganini Quartet” was the first acquisition by the Foundation in 1994 from the Corcoran Gallery of Arts in Washington, D.C. From the following year, the quartet has been played by the Tokyo String Quartet which has continued to be active as one of the world’s leading quartet since then.

We are pleased that the Tokyo String Quartet not only enjoyed playing our instruments, but also played leading roles in bringing great successes to our charity concerts, our now already well-known “All Strad. Concerts”. We would like to extend our deep gratitude for their superb contributions towards the Foundation’s activities over the years.

As you may know, the Tokyo String Quartet’s extraordinary 44-year performing history will come to an end in June 2013. Tonight will be the very last opportunity for us to present their concert. We hope that you will enjoy their superb harmony.

We would like to take this opportunity to express our sincere gratitude to The Nippon Foundation for their generous support to make this concert possible.

Program Note

クライヴ・グリーンズミス
Clive Greensmith

ベートーヴェン

弦楽四重奏曲 第 11 番 ヘ短調 作品 95「セリオーン」

この作品の題名は、ベートーヴェン自身が付けたもので、彼はある手紙に“この曲はいわゆる通の愛好家のために書かれたもので、決して公の場で演奏することのないように”と記しています。まさにその通りで、我々はこの作品のもつ実験的性格を常に意識させられます。感情の極限をドラマチックに描いたこの作品は、ベートーヴェンの中期と後期の両方の作風を備えているかのようです。これは彼の四重奏曲の中で最も短い作品で、思いもよらないほどの様々なアイディアと技巧に満ちています。彼がこの作品を書き上げたのは、極めて意欲的で大規模、革新的とされる四重奏曲作品 59 を書いたわずか 4 年後のことですが、彼は、数年の間この作品の出版を見合わせていました。なぜなのでしょう。この曲は、簡潔で力強く、かつ、もったいぶったような演説調の表現で始まり、激しいドラマとその対比への道筋を示します。強烈な勢いと突然の休止との狭間にみられる激しさは、既に 2 小節目から始まっており、この荒れ狂うような第一楽章は、このまま衰えること無く切迫感をもって突き進んでいきます。彼の四重奏曲作品 59 第 1 番の展開部はとても長いことで知られていますが、それとはとても対照的に、この曲の展開部は、演奏ではおそらく 25 秒以上はかからないでしょう！ベートーヴェンの最も熱情に満ちた音楽によくあることですが、奏者が曲をコントロールしているのではなく、むしろ魔力のようなものに奏者が導かれていることが明らかに感じられます。

第二楽章はこれまでとは趣の異なる二長調で、一音ずつ無垢な様子で進むチェロのソロで始まります。そこからフーガが始まりそうになるのですが、モチーフは他の楽器に引き継がれることなく、代わりに第一ヴァイオリンが優しく温かいメロディーで応えます。この上なく優美に書かれたこの部分で、遂にこの四重奏曲は穏やかで静かな共生へ向かい、バッハ風の対位法でそれぞれの楽器が前面に出たり引いたりしながら四つの楽器が調和します。しばしば引用される‘ロマンティック’という表現をここでそのまま用いるには注意が必要で、作曲家個人の想いが、痛切で物悲しい美しさを伴って溢れて出る時、この楽章の持つ叙情性が最高潮に達し、私達の心を打つのです。

扇動者ベートーヴェンは劇的なユニゾンで第三楽章の始まりを告げます。第一楽章同様この楽章でも、絶え間ない遮りと

激しい気分の揺れが強い不安感を生み出します。急激な転調の中で演奏される三重奏は忘れがたいほど叙情的で、ここで一息つくことが出来ますが、ベートーヴェンは、第一楽章のモチーフが第三楽章の主題として支配的に表れることに執拗に拘りました。急にペースが速まり、断固とした様子で楽章が終わります。

最終楽章を先導するラルゲットは、この作品全体において最も哀愁を漂わせています。ためらいがちに歌うレチタティーヴォのようなフレーズの間を不安げに少しずつ進んでいく様子は、しばしば聴き手を心もとない気持ちにさせます。不気味な移行部が、いつの間にか私達を気が滅入る激しいアレグレットの世界へと誘い、第一楽章のあの不安定さに戻るのです。これは非常に交響曲的要素の強い楽章で、時折、四人の奏者が無理なく出せる音以上のものが要求されます。さて、私達はこの‘驚くべき’エンディングをどう考えれば良いのでしょうか?! こんなにも強烈な作品が、このように一見不条理な形で終わることがあって良いものなのでしょうか? 聴衆の皆様、たとえこの作品が、これほど楽観的な調子で突然に終わることが信じられなかったとしても、ぜひ、熱烈な拍手をお願いします。

Beethoven

String Quartet No. 11 in F minor, Op. 95 "Serioso"

Beethoven himself gave the title to this work and wrote in a letter that it was "written for a small circle of connoisseurs and is never to be performed in public". Indeed, one is constantly aware of the experimental nature of this quartet, a dramatic work full of emotional extremes that seems to straddle both the composer's middle and late period styles. It is his shortest quartet, compact and brimming with an astonishing variety of ideas and techniques. Written only four years after the hugely ambitious, large scaled, ground breaking set of quartets op 59, Beethoven withheld the piece from publication for several years. One wonders why? The work begins with a declamatory statement - terse, muscular and at the same time almost cryptic, setting the stage for high drama and violent contrast. The intensity one experiences between extreme momentum and jolting halts is with us from only the second bar, and the turbulent opening movement continues to thrust forward with virtually unabated urgency. The famously lengthy development section of his quartet op 59 no 1 stands in massive contrast to a development section here, that in performance, might last no longer than about

twenty five seconds! As is often the case with Beethoven's most intense music, there is a palpable sense that the players are definitely not in control of the music; rather, *they* are the ones being driven by an almost demonic force.

The second movement begins with the solo cello, moving stepwise with almost naive innocence, notably set in the remote key of D major. It's possible that this could be the start of a fugue, but the motif is not taken up by the others and is instead answered by a melody of great tenderness and warmth in the first violin. With exquisitely beautiful part writing, the quartet is here finally able to move into a more serene, tranquil coexistence and the instruments breathe together stepping in and out of the foreground in Bachian counterpoint. Though one should be careful when using the oft quoted term 'romantic' the emotional climax of the lyrical material of this movement is striking for its intensely personal outpouring of poignant, plaintive beauty.

Beethoven the provocateur announces the start of the third movement with a dramatic unison statement. As in the first movement, the constant interruptions and violent mood to swings create an atmosphere of potent unease. Though there is respite to be found in the hauntingly lyrical trio, arrived at by some extreme modulations, the movement's central theme is Beethoven's maniacal obsession in seeing this frenzied opening motif predominate. An abrupt quickening of the pace brings us to the conclusion of the movement, uncompromising in its finality.

The Larghetto that precedes the final movement contains some of the most elegiac music of the entire work, edging uneasily forward between tentative, recitative-like phrases, often leaving the listener without a sense of firm ground. An eerie transition launches us, almost imperceptibly into the Allegretto, a world of brooding intensity and a return to the volatility of the opening movement - a truly symphonic movement that at times seems to demand more sound than four players can comfortably attain. What do we make of the 'surprise' ending?! How can a work of such intensity conclude in such a seemingly absurd manner? Dear audience, please remember to applaud with enthusiasm, even though you might not believe that the work has suddenly finished in such an optimistic tone!

メンデルスゾーン

弦楽四重奏曲 第4番 ホ短調 作品44第2番

2008/09シーズンは、メンデルスゾーン生誕200周年ということで、私達は彼の作品をたびたび演奏する機会に恵まれました。四重奏団としてこれまで40年近くツアーをしてきた中で、不思議なことにメンデルスゾーンの曲をあまり取り上げることはありませんでした。メンデルスゾーンは、同時代の作曲家と比べて様式が容易で重厚さに欠けると誤った認識をされていたことが過去にあったかもしれませんが、2009年、際立って優れているこの人物を世界中が祝福する中、私達もその称賛の声に加わったのです。私達がパーミンガム公会堂でコンサートを行った際、メンデルスゾーンも立ったステージで、開演前に一人感慨にふけたことを思い出します。1846年、オラトリオ「エリヤ」を世界初演するためにやって来たこの作曲家兼指揮者を、何千という市民が出迎えたといいます。

あらゆる時代において、メンデルスゾーンが最も才能に溢れ、進歩的で研究熱心な、そして多方面に通じた音楽家の一人であることを疑う余地はありません。彼は卓越したピアニスト、熟練した作曲家であり、画家、作家でもありました。彼は、現在あるような指揮者の役割を確立し、ショパン、シューマン、ベルリオーズの作品を世に広め、また、ライプツィヒ音楽院の設立を推進しました。そこで彼は、信仰心に近い情熱を持ってJ.S.バッハとヘンデルの作品を復活させ、世に広めることに大変力を尽くしました。

メンデルスゾーンの作品44は1837年から1838年の間に作られた3つの作品から成ります。これら3つの四重奏曲はどれも、彼が作曲の様式を自由自在に使いこなす能力と、それぞれの楽器から多様な音色を引き出す天賦の才能を備えていたことを示しています。この作品では、第一章節目から持続して響くチェロの暗い音色と静かに脈打つ内声部が力強く展開し、第一ヴァイオリンの憂鬱なメロディーがそれに続きます。‘アップパッシオナート’と題されたこの楽章では、切迫感に緩急をつけながら、明と暗のパッセージワークが劇的なコントラストを提示し、二つのテーマが絶えず前に出ようと挑みかけます。最後に勝利するのは第一のテーマで、それは楽章の終わりのチェロが織りなす劇的なフォルティッシモに表れています。ベートーヴェンの四重奏曲作品59第2番を弾いた後にこの曲を弾くと、偶然にも同じホ短調なので不思議な‘デジャヴ’を覚えます。

第二楽章はスケルツォです。メンデルスゾーンの最も魅力的な部分が表れていると同時に、神秘性や暗い音色がないわけではありません。導入部からきらびやかに輝くモチーフは、楽章全てを活気付けています。メンデルスゾーンは、優雅で軽快、実に愉快的な‘メンデルスゾーン風’のスタイルで弦楽器の楽曲を作曲していますが、これは同時代の作曲家たちが決して倣うことのできない点でした。

第三楽章を印象深いものに行っているのは、‘無言歌’として知られるメンデルスゾーンのもう一つの特徴である叙情的なスタイルです。この楽章は、ト長調の温かな表現によって迎えられ、この作品の前半で表現された劇的で壮麗な部分と好対照を成しています。ここでもメンデルスゾーンは、一つのグループの中で様々な音を巧みに扱っており、チェロをオルガンのように響かせ、中間音は穏やかに脈打つように、第一ヴァイオリンには上から降るようにごく自然に甘い叙情性をもって歌わせ、信じられない程の美しい音の景観を生み出しています。少しだけ歴史へ寄り道して先ほどの話に戻りますと、‘無言歌’と題されるメンデルスゾーンの有名なチェロとピアノのための作品 109 は、エリーゼ・バルビエ・クリスティアーニ夫人に捧げられた曲で、彼女はこれをストラディヴァリウスの 1700 年製チェロで演奏していました。艶やかなストラディヴァリウスのチェロ ‘クリスティアーニ’をガラスケース越しにクレモナ市立博物館で見たことがあります。またこのチェロを弾かせていただいたことはありませんが、弦楽四重奏曲作品 44 第 2 番の美しいアンダンテには、優美な光沢をもち、美しい音色が豊かに響くパガニーニ・クワルテットがぴったりだと言えます。

フィナーレは猛烈に速いプレストで、活気に溢れた旋律と叙情的な旋律との掛け合いが聴きどころです。丁寧に歩調を合わせながら徐々に激しさを高め、驚くほど刺激的なエンディングを創り出します。熟練の音楽家が確信を持って書いた作品にふさわしい結末です。

Mendelssohn **String Quartet No. 4 in E minor, Op. 44 No. 2**

We performed a great deal of Mendelssohn's music in the season 2008/09, to celebrate the two hundredth anniversary of his birth. This was fascinating for many reasons, not least of all for the fact that we had played relatively little of his music in almost four decades of touring as a quartet. How this happened, is still a bit of a mystery to me, but in 2009, as

the world celebrated the music of this evidently remarkable man, we too joined in the chorus of praise for a composer who might well have been misjudged by history for writing music that is rather light in style and not as profound as that of his contemporaries. I can recall a humbling experience, standing on the exact same stage before a performance at Birmingham Town Hall, in a city that came out in its thousands to welcome the arrival of the composer *and* conductor for the world premiere of his Oratorio 'Elijah' in 1846.

Unquestionably, Mendelssohn was one of the most brilliant, progressive, industrious and well rounded musicians of all time. He was a superb pianist, a masterful composer, painter and writer. He practically invented the role of the modern conductor, championing works by Chopin, Schumann and Berlioz and helped to found the Leipzig Conservatory. A wonderful administrator, he was responsible for the revival of the works of J.S. Bach and Handel, two composers for whom he felt an almost missionary zeal.

His op 44 set consists of three works written between 1837 and 1838. All three of these quartets demonstrate a perfect command of compositional style and a distinctive flair for exploring the various timbres of each instrument within the group. From the opening bar of the E minor quartet, the stage is set with the combined forces of sustained dark-hued tones in the cello, quietly intense pulsating inner voices, followed by a brooding melody in the first violin. With the title 'Appassionato' the movement ebbs and flows with a sense of urgency, finding dramatic contrast between light and dark passagework and two themes that constantly vie for preeminence. Ultimately it is the first theme that triumphs, with a dramatic fortissimo statement near the end of the movement given to the cello. Having played Beethoven's quartet op 59 No. 2, which happens also to be in the same key, there is an uncanny feeling of 'deja vu' here.

The second movement is a scherzo that finds Mendelssohn at his most charming, though this is music that is still not lacking in mystery or without darker undertones. The sparkingly brilliant opening motif inspires the entire movement - a 'Mendelssohnian' style of string writing - graceful, fleet of foot and utterly beguiling, which his contemporaries never seemed quite able to emulate.

The famous 'song without words', another trademark of Mendelssohn's lyrical style is what makes the third movement so memorable. In a welcome move to the warmly expressive key of G major, the movement is a perfect counter balance to the drama and brilliance of the first half of the work. Once again, through the skillful manipulation of the different voices within the group, Mendelssohn is able to evoke a landscape of incredible tonal beauty, with organ-like sustained tones in the cello, gently pulsating middle voices and the sound of the first violin, singing sweetly, with unforced lyricism from above. To take a brief historical detour in a return to the theme of 'song without words', Mendelssohn's famous work for cello and piano op 109 was dedicated to Madame Elise Barbier Cristiani, who performed the work on her Stradivarius cello dated 1700. I have seen the lustrous looking 'Cristiani' Stradivarius instrument in its glass case sitting in the Civic Museum of Cremona. Though I have not had the pleasure of playing it, I can attest to the fact that the beautiful Andante movement of the quartet op 44 No. 2 is a piece perfectly suited to the exquisitely burnished, sumptuous tonal beauty of the Paganini Quartet.

The finale, a blisteringly fast Presto, features the interplay of two themes, one vigorous and the other lyrical. The careful pacing and sustained build up of intensity creates a marvelously exciting ending - a fitting conclusion to a boldly assured work, from the pen of a master musician.



認定 NPO 法人阪神淡路大震災「1.17 希望の灯り」支援チャリティコンサート
神戸文化ホール 2011年2月17日
Charity Concert for Hanshin-Awaji Network for Disaster Survivors
Kobe Bunka Hall, 17 February 2011
© 神戸新聞社



Photo by S. Yokoyama

ストラディヴァリウス 「パガニーニ・クワルテット」 Stradivarius "Paganini Quartet"

1680 Violin 1731 Viola
1727 Violin 1736 Cello

アントニオ・ストラディヴァリ（1644-1737）製作による楽器で構成されたクワルテットは、世界で6セットの存在が知られている。このクワルテットはその1つであり、19世紀の伝説的なヴァイオリニスト、ニコロ・パガニーニ（1782-1840）が所有していたことでも有名である。日本音楽財団は1994年にアメリカ・ワシントンD.C.のコーコラン美術館よりこのクワルテットを購入した。同美術館にこのクワルテットを寄贈した米国のアンナ・E・クラーク夫人の意志を受け継ぎ、当財団は4挺を常にセットとして四重奏団に貸与している。

This is one of the only six sets of quartet compiled with Antonio Stradivari's (1644-1737) instruments known to exist today. All the instruments of this quartet were once owned by Niccolò Paganini (1782-1840) a legendary violinist during the 19th century. Nippon Music Foundation acquired this quartet from the Corcoran Gallery of Arts in Washington, D.C. in 1994 and loans them as a set succeeding the will of Madam Anna E. Clark who donated the quartet to the Corcoran Gallery.

磯村 和英
Kazuhide Isomura

19世紀に超絶技巧とカリスマ的な音楽性で一世を風靡した、ヴァイオリニストで作曲家でもあったパガニーニは、クワルテットを弾くためにストラディヴァリウスを四つ手に入れました。その貴重なセット（パガニーニ・クワルテット）で17年余りに渡り、数え切れない程のコンサートを弾かせて頂き、日本音楽財団には感謝の気持ちで一杯です。

クワルテット全員がストラディヴァリウスで演奏するというのは、大変充実した素晴らしい体験でした。フォルテは音が抜けるように浸透するので、競い合うようにかなり立てる必要はなく、ピアノ、ピアニッシモはかなり小さく弾いても、演奏会場で音が消え入ってしまう心配がないのです。音色又は音の表情に関しては、楽器の反応が非常に鋭敏なので、繊細かつ変化に富んだ表現が出来ます。

ストラディヴァリウスは、ヴィオラをごく少数しか作らなかった上に、パガニーニが愛用したと言うことで、大変稀少価値のある素晴らしいヴィオラを私はお借りしていますが、個人的感想を率直に言いますと、それは楽器への挑戦の連続でした。敢えて例えを挙げれば、気位の高いサラブレッドを飼い馴らすと言う感じでした。相当な努力が必要でしたが、多くを学びました。

日本音楽財団には今後とも、世界の文化遺産である音楽と楽器を支援し続けて頂き、音楽を愛する皆様には、室内楽を多に楽しんで頂きたいと願っています。



ストラディヴァリウス・コンサート 2009
アカデミア美術館、イタリア・フィレンツェ 2009年11月7日
Encounter with Stradivari 2009
Galleria dell'Accademia, Firenze, Italy 7 November 2009
©Gianluca Moggi / New Press Photo

Niccolò Paganini was a virtuoso violinist and a composer whose transcendental technique and charismatic musicality dominated the music world during the 19th century. He acquired a set of four Stradivarius instruments to perform a string quartet. I am truly grateful to Nippon Music Foundation for loaning us this precious set of instruments (“Paganini Quartet”) to perform at countless number of concerts for over seventeen years.

It has been an extraordinary experience that all members of the Tokyo String Quartet were able to play the Stradivarius. The sound is so penetrating that we would play forte without having to roar in competition, and play the most piano or pianissimo without worrying that the sound may faint in a concert hall. The amazingly sensitive response from the instruments would allow delicate and varied expressions in tone and sound.

Stradivari made only a few violas, and among them was the viola loved by Paganini. To express my honest personal impression, playing such an exquisite and extremely valuable instrument has been a continuous challenge for me. It could be compared to taming a noble thoroughbred. I had to make considerable efforts, but learned so much through playing this wonderful instrument.

I sincerely wish Nippon Music Foundation for their continued support towards music and the instruments regarded as the cultural assets of the world, and hope that all music lovers will have great time enjoying chamber music.

池田 菊衛
Kikuei Ikeda

日本音楽財団主催による東京クワルテット最後の財団演奏会にご来場いただき、ありがとうございます。早いもので財団から「パガニーニ・クワルテット」を貸与されて18年が経ちます。

実はこの有名なストラディヴァリウスのセットの存在は随分前から身近に知っていました。友人でありライバルでもあったクリーヴランド・クワルテットがワシントンDCにあるコーコラン美術館から貸与されていたからです。メンデルスゾーンの八重奏曲を共演する機会があった時、当時同じ美術館から「アマティ・クワルテット」を貸与されていた我々は彼らの使っていたセットを大変興味深く見せてもらったものでした。

それから時を経て、日本音楽財団から我々に「パガニーニ・クワルテット」が貸与される事になりました。私の手元に“Stringed Instrument Collection in the Corcoran Gallery of Art”（1986年学習研究社発行）という本があるのですが、「パガニーニ・クワルテット」と「アマティ・クワルテット」の素晴らしい写真が横山進一さんの撮影で収められています。のちに東京クワルテットがこの本に収蔵されている両方の楽器を演奏できるようになるとは、出版されたこの本がコーコラン美術館から送られてきた時には思ってもみませんでした。

11年間使った1672年製のアマティ、そして1680年製のストラディヴァリウス。違いはどのような所にあるのか？と聞かれると返事に困るくらい2つの楽器は似ています。楽器にある魂が本当に似ているのです。演奏家にとって幸せなのは、名曲に出会うこと、美しい音響のホールで演奏する事、我々の演奏を楽しんで聞いて下さる聴衆に恵まれる事、そして素晴らしい楽器に出会う事です。

永い間応援して下さった聴衆の皆様、そして素晴らしい楽器を無償で貸与して下さった日本音楽財団に感謝の気持ちで一杯です。

Thank you very much for attending the very last concert of the Tokyo String Quartet presented by Nippon Music Foundation. Time has flown, and it has been eighteen years since we started playing the “Paganini Quartet” on loan from the Foundation.

Actually, I have known this famous set of Stradivarius for quite some time, as they had been played by our friend and rival, the Cleveland Quartet on loan from the Corcoran Gallery of Arts in Washington, D.C. I recall an exciting experience of viewing their instruments when we performed Mendelssohn’s Octet together. At that time, our Quartet was playing the “Amati Quartet” also on loan from the same Corcoran Gallery.

As time went by, we were fortunate to have the “Paganini Quartet” on loan from Nippon Music Foundation. I have a book with me entitled “Stringed Instrument Collection in the Corcoran Gallery of Art” (Published by Gakken in 1986) containing the beautiful photographs of the “Paganini Quartet” and the “Amati Quartet” taken by Shinichi Yokoyama. At the time when the Corcoran Gallery sent me this book just after it was published, I would have never imagined that the Tokyo String Quartet would later be able to play both quartets among their collection.

What difference lies between the 1672 “Amati” I had played for 11 years and the 1680 “Stradivarius”? This is a very difficult question to answer, as the two instruments are very much alike. The souls within the instruments are truly similar. What are the happiest things for musicians are—encountering masterpieces, performing at concert halls with beautiful acoustics, having great audiences enjoying our performances, and encountering superb instruments.

I would like to express my deepest gratitude to our audiences for their wonderful supports and to Nippon Music Foundation for their generosity in loaning us their precious instruments for gratis over so many years.

マーティン・ビーヴァー Martin Beaver

ストラディヴァリウス 1727 年製ヴァイオリン「パガニーニ」という音楽のパートナーと共に、東京クワルテットの一員として過ごすことができたことをとても光栄に思います。11 年間この素晴らしい楽器を貸与下さった日本音楽財団に心よりお礼申し上げます。

クワルテットの他のメンバーたちは、財団の素晴らしい楽器を演奏してきた経験について言及していますので、私はクワルテットと日本音楽財団の長年にわたる繋がりについて書こうと思います。これまで長年、クワルテットは幸いにも世界各地で開催されてきた財団の「ストラディヴァリウス・コンサート」に幾度となく出演させて頂きました。

これらのコンサートは多くの点で大変意義があります。まず、これほど多くのストラディヴァリウスに囲まれ、名器に触れたことに感激しました。どのコンサートも、日本音楽財団が音楽界で行っている偉業の意義深さを目に見える形で示しており、大変素晴らしいものです。

コンサートを通じて新しい文化を体験することもできました。日本音楽財団のおかげで、私は北京、プラハ、福岡等の地を初めて訪れることができました。コンサートの多くは東京のサントリーホール、ブリュッセルのパレ・デ・ボザール、ザルツブルクのモーツァルテウムなど、一流のホールで行われました。フィレンツェのアカデミア美術館では、ミケランジェロのダビデ像の前で演奏するという、息をのむような経験ができました！

財団コンサートで財団の他の楽器貸与者たちと出会い、共に音楽を創る機会を得られたことが、おそらく最も素晴らしい点だったと思います。ステージでの演奏はもちろん、ステージ以外でも楽しい時間を過ごし、長期にわたる友情を築いてきました。素晴らしい楽器と共に仲間たちとリハーサルを行い、アイデアを出し合い、素晴らしい音楽を創るのはとても嬉しい経験でした。

コンサートでは、日本音楽財団が我々に一流の待遇をして下さったことは決して忘れてはいけません。移動や宿泊、計画の細部に至るまで、日本音楽財団の素晴らしい取り計らいのおかげでいつも安心していられました。

11年間、この素晴らしい楽器を演奏できたことは大変な名誉であり、忘れがたい経験となりました。日本音楽財団に対して、改めて深く感謝申し上げます。

I have been so fortunate and privileged to have the 1727 “Paganini” Stradivarius violin as my musical companion during my life with the Tokyo String Quartet. I am truly indebted to the Nippon Music Foundation for the honor of being this instrument’s custodian for eleven years.

My colleagues have written of their experiences playing these wonderful instruments. I would like to write about another fulfilling aspect of our quartet’s long association with the Nippon Music Foundation. Over the years, the Tokyo String Quartet has happily been a frequent participant in the Foundation’s “Encounter with Stradivari” concerts, held internationally.

These concerts are meaningful for many reasons. Firstly, the unique opportunity to see and hear so many Stradivarius masterpieces side by side has been thrilling. The concerts have been a wonderful, tangible way to show the importance of the great work that the Nippon Music Foundation is doing for the musical world.

These concerts have given me the privilege of experiencing new cultures. The Nippon Music Foundation made it possible for me to visit places such as Beijing, Prague and Fukuoka for the first time. Many of the concerts have taken place in the finest of concert halls such as Suntory Hall in Tokyo, the Palais des Beaux-Arts in Brussels and the Mozarteum in Salzburg. Performing at the Galleria dell’Accademia in Firenze, in front of Michelangelo’s “David”, was a breathtaking experience!

Perhaps the most enjoyable aspect of these concerts has been the opportunity to meet, get to know and make music with our fellow instrument recipients. I have enjoyed time with these artists both onstage and offstage and have made many lasting friendships. It has been a pleasure to rehearse together, exchange ideas and weave a wonderful sound together with these incredible instruments.

Of course, I would be very remiss not to mention the first-class treatment shown to us by the Nippon Music Foundation on these occasions. From travel and accommodation to the very last detail in planning, it has always been a pleasant and easy experience thanks to the thoughtfulness and expertise of the Nippon Music Foundation.

In closing, I would again like to express my profound gratitude to the Nippon Music Foundation for the honor and privilege of playing this wonderful instrument and for all the unforgettable experiences over the past eleven years.



ストラディヴァリウス・コンサート 2004
モーツアルテウム、オーストリア・ザルツブルク 2004年4月4日
Easter with Stradivarius
Morzarteum, Salzburg, Austria 4 April 2004
©BLOW UP / Design tt-unit.com

東京クワルテット

マーティン・ピーヴァー
池田 菊衛
磯村 和英
クライヴ・グリーンズミス

ストラディヴァリウス
「パガニーニ・クワルテット」
1727 年製 ヴァイオリン
1680 年製 ヴァイオリン
1731 年製 ヴィオラ
1736 年製 チェロ



©Marco Borggreve

桐朋学園で斎藤秀雄によって多大な影響を受けた日本人 4 名により、1969 年ジュリアード音楽院で結成。1970 年ミュンヘン国際コンクールでの圧倒的優勝以来、楽壇の最高峰の弦楽四重奏団として、卓越した技巧と優美な演奏スタイルで聴衆を魅了し続けている。メンバー交代を経て、現在は、マーティン・ピーヴァー、池田菊衛（ヴァイオリン）、磯村和英（ヴィオラ）、クライヴ・グリーンズミス（チェロ）で構成されている。本拠地をニューヨークに置き、毎年欧米を中心に 100 以上のコンサートを行っている。

教育活動では、1976 年以來イェール大学のレジデンス・クワルテットとして後進の育成に携わるほか、欧米とアジアで定期的にマスタークラスを開催している。

ハルモニア・ムンディ、BMG/RCA ピクチャー・レッド・シール、EMI、ドイツ・グラモフォン、ビドルフ・レコーディングスからリリースされたベートーヴェン、シューベルト、バルトークの弦楽四重奏曲全曲を含む録音は、約 50 枚という画期的な数を誇っている。

2012-2013 のシーズンでは、アメリカ、ウィーン、パリ、ロンドンなど世界主要都市でのコンサートを予定。44 年間の活動に終止符を打つ。

1995年より日本音楽財団保有のストラディヴァリウス「パガニーニ・クワルテット」を使用している。

マーティン・ビーヴァー（第1ヴァイオリン）

2002年より参加。インディアナポリス、モントリオール国際ヴァイオリン・コンクール優勝、ベルギー・エリザベート王妃国際音楽コンクール2位。

池田菊衛（第2ヴァイオリン）

1974年より参加。桐朋学園で鷺見三郎に、ジュリアード音楽院でドロシー・ディレイとジュリアード弦楽四重奏団に師事。日本音楽コンクール優勝。

磯村和英（ヴィオラ）

東京クワルテット創設メンバー。桐朋学園で斎藤秀雄に師事。ナッシュビル交響楽団の副コンサートマスターに就任後、ジュリアード音楽院にて学ぶ。

クライヴ・グリーンズミス（チェロ）

1999年より参加。クレモナ（イタリア）の第1回プレミオ・ストラディヴァリで2位受賞。ロンドンのロイヤル・フィルハーモニック管弦楽団では首席チェリストを務めた。

Tokyo String Quartet

Stradivarius

“Paganini Quartet”

Martin Beaver

Stradivarius 1727 Violin

Kikuei Ikeda

Stradivarius 1680 Violin

Kazuhide Isomura

Stradivarius 1731 Viola

Clive Greensmith

Stradivarius 1736 Cello

After 43 seasons, the Tokyo String Quartet has announced that 2012-2013 will be their last. Regarded as one of the supreme chamber ensembles of the world, the Tokyo String Quartet - Martin Beaver and Kikuei Ikeda (violins), Kazuhide Isomura (viola) and Clive Greensmith (cello) - has collaborated with a remarkable array of artists and composers, built a comprehensive catalogue of critically acclaimed recordings and established a distinguished teaching record. Performing over a hundred concerts worldwide each season, the quartet has a devoted international following across the globe.

Officially formed in 1969 at the Juilliard School of Music, the quartet traces its origins to the Toho School of Music

in Tokyo, where the founding members were profoundly influenced by Professor Hideo Saito. Soon after its formation, the quartet won First Prize at the Coleman Competition, the Munich Competition and the Young Concert Artists International Auditions. An exclusive contract with Deutsche Grammophon firmly established it as one of the world's leading quartets, and it has since released about 50 landmark recordings. The ensemble now records on the Harmonia Mundi label.

The members of the Tokyo String Quartet have served on the faculty of the Yale School of Music as quartet-in-residence since 1976. Deeply committed to coaching young string quartets, they conduct master classes in North America, Europe and the Far East.

They have been performing on the "Paganini Quartet" on loan from Nippon Music Foundation since 1995.

Martin Beaver, first violinist, joined the quartet in 2002. He was a top prize-winner at the international violin competitions in Indianapolis and Montreal, and won the silver medal at the Queen Elisabeth Competition in Belgium.

Kikuei Ikeda, second violinist, joined the quartet in 1974. He studied with Dorothy DeLay and the Juilliard String Quartet at The Juilliard. He was a prize-winner of the Music Competition of Japan and the Washington International Competition for Strings.

Kazuhide Isomura, violist, is now the only founding member of the Quartet. He studied the violin, viola and chamber music at The Juilliard. Prior to joining The Juilliard, he was an assistant concert master of the Nashville Symphony.

Clive Greensmith, cellist, joined the quartet in 1999. He has won the second place in the inaugural Premio Stradivari held in Cremona, Italy. He was the principal cellist of the Royal Philharmonic Orchestra.

日本音楽財団
NIPPON MUSIC FOUNDATION

Akasaka 1-2-2, Minato-ku, Tokyo 107-0052
Tel. (03)6229-5566 Fax. (03)6229-5570
<http://www.nmf.or.jp> info@nmf.or.jp

日本音楽財団の事業は、BOAT RACE の交付金による日本財団の助成により運営しています。